

MLシステムに沿った音楽授業におけるシラバスの見直し — コロナ禍における授業形態から得られたもの —

本野洋子

東京福祉大学 短期大学部 (伊勢崎キャンパス)

〒372-8831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2022年10月31日受付、2023年2月2日受理)

抄録：本大学での音楽関係の教科における対面授業は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年度以降遠隔でせざるを得ない状況になった。その後、規制が若干緩和されるに伴って2022年度春期からは対面と遠隔を併用した授業が行われてきた。そこで筆者が担当する『こどもの音楽Ⅰ』について、親シラバスにある3つの学習目標ごとに、対面、遠隔、併用の授業で示された15回のシラバスの授業内容を比較検証した。これは今後さらに規制が緩和された後、コロナ禍前の対面授業に戻るのではなく、遠隔と併用の授業から得られたメリットを対面授業に取り入れることによって、新しいスタイルでの対面授業が行えるのではと考えたからである。その結果、遠隔や併用の授業で行ってきた音楽の基礎理論の教授方法を対面授業に取り入れることによって、ミュージック・ラボラトリーシステムの形態に沿った、より指導効果の高い対面の授業を構築できる可能性が示された。

(別刷請求先：本野洋子)

キーワード：シラバス、ミュージック・ラボラトリー、対面授業、遠隔授業、対面・遠隔併用授業

1. 緒言

保育者養成を行っている本学保育児童学部および短期大学部こども学科におけるピアノレッスン等音楽に関しては、従来二つの音楽教室で、一人に1台キーボードが割り当てられたMLシステムに沿った対面による授業¹⁾が行われてきた。

しかし2020年初めに起こった新型コロナウイルス感染の国内での拡大は、4月の新年度が始まる時期になっても収束の気配を見せず、全国的レベルで緊急事態宣言が出されるに至って、大学において本来あるべき姿としての対面授業を行うことができなくなった。

このような状況の中、文部科学省の要請により本学も全授業をオンライン(ZOOM)で開講することになり、約1か月の準備期間を経て2020年5月からの新学期はすべてオンラインで授業を行うことになった。その為緊急にカリキュラムがオンライン開講に沿った内容に見直されたが、それは音楽関係の教科においても同様であった。すなわち、親シラバス²⁾は従来通りで変更せず運用面で臨機応変に対応できるシラバスに変更されたのであった。よって『ピアノ演奏』、『子どもの歌歌唱』、『弾き歌い』等実技および演習もすべてオンラインによって行われることになった。

しかし、弾き歌いなどピアノの演奏を伴う音楽の授業においては、全学生と一緒に子どもの歌を斉唱する際、お互い同士の声にタイムラグがあったり、マイクの音をONにしておくとハウリングが起こって聞こえなくなったり、ピアノを弾いている画面が時々静止したり、出ている音との間にタイムラグがある等、授業を行う側、受講する側の通信状況が大きく影響してしまうなど、多くの問題を持っていた。その後、収束の気配を見せたときには一時期、学生が対面とオンラインのいずれかを選択して授業を受けることができるというハイブリットの授業が行われたが、その後再び感染が拡大してオンラインの授業のみが行われることとなった。

2022年度になってポストコロナを見据え、経済的・社会的活動が停滞してはいけないという政府の呼びかけもあって、コロナウイルスによる感染の影響は終息を見せない中、ハイブリットの授業が継続して行われている。

そこで、図らずも三通りの授業形態がこの3年間で実施されたことから、本研究において、MLシステムに沿った対面授業(以下対面授業)、オンラインでの遠隔授業(以下遠隔授業)、対面とオンライン併用のハイブリット授業(以下併用授業)それぞれにおけるシラバスの作成、及び実施にあたっての運用面でのメリットとデメリットなどを

検証することにより、ポストコロナを見据えた今後の音楽に関する望ましい授業形態の在り方を考察することとした。村木(2022)は「オンライン授業で見出した手法を対面授業で生かすことによって、教室活動をより有意義なものにすることを再認識することができた。オンライン授業の普及により新常識となった受講者全員のパソコン持参や教育アプリケーションの活用を、ポストコロナでは対面授業の中でも生かせるはずだ。(p.115)」と述べているが、本論では、将来的にICTの活用は有り得るとしても、まずは現在できうる授業形態の検証からシラバスの構築を考察していくこととする。

検証する授業形態は具体的には以下の三通りである。

- ・ 2020年3月まで⇒音楽教室での対面によるMLシステムに沿った授業(対面授業)
- ・ 2020年5月から2022年3月まで⇒ZOOMによる遠隔授業【一時期対面遠隔併用授業の期間もある】(遠隔授業)
- ・ 2022年4月から2022年9月まで⇒対面とZOOMによる遠隔併用授業(併用授業)

2. 研究対象と方法

1) 研究対象と目的

対面のみ、遠隔のみ、対面と遠隔の併用それぞれの授業形態のシラバスおよびその授業内容を研究対象として検証することにより、各授業形態による授業のメリット及びデメリットを明らかにする。そして今後ポストコロナを見据えた上で再び対面による授業のみが行われるようになったとき、遠隔授業及び併用授業のメリットを取り入れたシラバスを作成することにより、従来の対面授業よりもさらに教育効果の高いMLシステムに沿った新しい授業スタイルを構築する。

2) 研究方法

本学短期大学部の2019年度～2022年度までの音楽関係教科は以下のとおりである。

- | | |
|----------|---------------|
| 1年春期(前期) | 音楽基礎Ⅰ(必修) |
| 1年秋期(後期) | 音楽基礎Ⅱ(必修) |
| 2年春期 | こどもの音楽Ⅰ(必修) |
| 2年秋期 | こどもの音楽Ⅱ(選択必修) |

- (1) これらの中で、筆者が2019年度から2022年度にかけて連続して担当した『こどもの音楽Ⅰ』の親シラバスにある『1.音楽理論を理解し、子どもの歌の音楽上の構造を理解する』『2.ピアノ演奏および弾き歌いの技術を習得する』『3.保育の中での様々な音楽活動に対応できる演奏

力をつける』という3つの学習目標に関して、2019年度、2020年度、2022年度それぞれのシラバスの講義日程における内容を3通りの学習目標ごとにそれぞれ抽出して比較し、授業での取り組みの差異を明らかにする。なお、2021年度は当初併用で行われていたものが急遽全て遠隔に切り替わったため、比較対象から外すことにした。

- (2) 3通りの異なる授業形態のメリット、およびデメリットを挙げて比較し、遠隔あるいは併用の授業でのメリットを取り出す。
- (3) (2)で取り出したメリットが、それまでの対面の授業で行っていなかった、あるいは行えていなかった点を検証し、今後対面の授業で活かせるのかどうかを検証する。
- (4) 遠隔および併用の授業のメリットを取り入れることによって、従来のMLシステムに沿った対面授業よりもさらに教育効果の高いMLシステムに沿った新しい授業スタイルを構築できることを明らかにする。

3. 結果

1) 学習目標の比較

本学短期大学部におけるカリキュラム自体は2019年度以前とそれ以後で変更はなく、したがって親シラバスも授業形態が変化しているにも関わらず変更はない。

しかし、授業内容は授業形態が変化しているのだから、それぞれ3通りに変更されている。そこで、親シラバスにある学習目標の枠を超えることなくどのように授業内容を変更したかを学習目標の内容ごとに抽出し比較したものを次に示す。

なお2019年度はコロナ禍前であり、MLシステムに沿った対面授業が行われていた。その後2020年4月になりコロナ禍による緊急事態宣言が出された。本学においては2020年度は全面遠隔授業とする措置が取られたが、オンライン設置及びオンラインでのパソコンの操作に関する解説や授業の実施方法の説明など準備期間が必要であった。そのため開講時期が約1か月遅れたため全授業回数が春期は13回となった。その後緊急事態宣言は一旦解除されたが再び出された。2021年度当初は解除されたばかりで4月初めは併用授業であったが途中で緊急事態宣言が出されたため、急遽、全面遠隔授業に切り替えられた。その後緊急事態宣言が新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置に切り替わったが、2022年3月に入りまん延防止等重点措置が全面解除された。しかし、依然全国的に感染者も多いことから、本学において2022年度は遠隔授業・対面授業併用で15回実施された。したがって本研究では2019

年度春期(対面授業)、2020年度春期(遠隔授業)、2022年度春期(併用授業)のシラバスを比較対象とする。

(1)『1. 音楽理論を理解し、子どもの歌の音楽上の構造を理解する』

表1は学習目標『1. 音楽理論を理解し、子どもの歌の音楽上の構造を理解する』に該当する授業内容を授業形態ごとに抽出し比較したものである。

具体的にシラバスの各回における授業内容と実際にを行った授業について各授業形態を比較しながら記す。

第1回目は、対面授業と併用授業では、経験に応じた曲を選曲するための時間としたために、また、遠隔授業では伴奏を考えながら弾くことに時間を割いたので、学習目標の1.の内容は含まなかった。

第2回の「和音の構造とコードネーム」は、対面授業のときは音階の並びと三和音、各音のコードネームについて教科書を参照し、口頭で説明して弾かせていた。遠隔授業では各自の手元に鍵盤がないので、五線紙に書かせることにした。しかし、実際に実施すると、音符を書くまでの前段階で、ト音記号や大譜表の書き方、音符の書き方などの説

明をしなければ書けなかったので併用授業のシラバスには、記譜をする上での注意点などを第2、3、4回目に盛り込むことにした。

第3回のメジャーコードとマイナーコードについて、対面授業においてはCコードとCmコードは第3音が半音下がるだけの関係であると口頭で説明し、実際の鍵盤上で指をずらして弾けば違いがわかって弾くことができた。しかしながら、遠隔授業では、CコードとCmコードは第3音が半音下がる関係であることを理解させるために、第3音に \flat がつくことで、根音と第3音の音程が長3度から短3度に変わり、また第3音と第5音の音程は短3度から長3度になるとことを具体的に記譜をして説明をしなければならず、また書いただけでは響きの違いを体感できず、学生が理解できるような詳細な説明ができなかった。そのため併用授業のシラバスではメジャーコードとマイナーコードの文言を外した。

第4、5、6回目ではコードネームだけではなく、各調の機能によって和音を転回³⁾させて弾くべきであり、そのためには、カデンツと音階上の和音記号についての理解が不可欠であるので、対面授業時は教科書を参照し、口頭で和音記号、コードネームを言いながら弾かせていた。しかし、

表1.『こどもの音楽Ⅰ』親シラバスおよび学習目標『1. 音楽理論を理解し、子どもの歌の音楽上の構造を理解する』の比較

授業形態ごとのシラバスの比較			
回	2019年度春期 対面授業(ML)	2020年度春期 遠隔授業(ZOOM)	2022年度春期 併用授業
1	(該当の記載なし)	(該当の記載なし)	(該当の記載なし)
2	和音の構造とコードネーム	和音の構造とコードネーム	音楽理論①写譜をする
3	メジャーコードとマイナーコード	メジャーコードとマイナーコード	音楽理論②楽譜の書き方
4	セブンスコードの書き方	セブンスコードの書き方	音楽理論③大譜表の書き方
5	音階音度上の和音とコードネーム	コードネームを和音記号に置き換えて弾く	音楽理論④主要三和音について
6	コードネームを和音記号に置き換え弾く	I, IV, V, V7(メジャーコード)を使ったカデンツによるコードネーム奏	音楽理論⑤V7を用いたコードネーム
7	I, IV, V, V7(メジャーコード)を使ったカデンツによるコードネーム奏	II, III, VI(マイナーコード)を含むカデンツによるコードネーム奏	音楽理論⑥拍、拍子について
8	II, III, VI(マイナーコード)を含むカデンツによるコードネーム奏	課題研究①	音楽理論⑦弱起、シンコペーションについて
9	伴奏形の工夫	借用和音、音階音度上にない様々なコードについて	ピアノ弾き歌い発表
10	様々な奏法 (リズム遊びなどに使う音楽の弾き方)	楽譜上のコードを分析する 楽譜の書き方①	音楽理論⑧色々な音階とコードネーム
11	借用和音、音階音上にない様々なコードについて	楽譜の書き方②	(該当の記載なし)
12	楽譜上のコードを分析する	課題研究②	音楽理論⑨主要三和音のコードネーム
13	記譜について	課題研究で作成したコード譜から自分が完成させた伴奏譜で弾き歌いする。	音楽理論⑩コードネームとカデンツ
14	コードネーム奏のまとめ	授業無し	コードネーム奏のまとめ
15	(該当の記載なし)	授業無し	(該当の記載なし)

遠隔授業では、演奏を指導するのが困難なためコードネームと和音記号を両方併記させる中でカデンツなどを理解させた。

第7、8、11回目の対面授業では、実際に記譜をする作業時間を持たず弾かせていたので、主要三和音以外の副三和音、音階音度に無い借用和音にまで触れることができた。しかし、遠隔授業になって第10、11回目に記譜をする作業を盛り込んだところ、記譜をするにあたり学生が基本的な記譜法の習得が不十分であったので詳細な説明を行わざるを得なかった。そのため、多くの学生が主要三和音、およびセブンスコード⁴⁾の理解までにとどまって、多様な和音には触れられなかった。なお、遠隔授業の第8回目は課題研究に取り組む時間となっていたため、学習目標1.の内容は入っていない。

第9、10回目で、対面授業では8分音符や16分音符、付点のリズムに伴奏形を変えることで、いろいろな伴奏パターンが弾けることを確認していたが、遠隔授業では実際にリズムを変化させ演奏することが困難であった。そこで、遠隔授業の第9回目においてはコードネーム譜を作成させたうえで、子どもの歌の弾き歌い楽譜を発表させた。また、遠隔授業ではリズムを変化させて演奏することが困難であるということから、併用授業のシラバスにはいろいろな伴奏形のパターンは記載せず、楽譜上の記号や音楽用語などの注意点を記載した。

遠隔、併用授業で実際に記譜ができた「このぼり」「かたつむり」「むすんでひらいて」の3曲はそれぞれハ長調、ニ長調で、またI、IV、V、V7でカデンツの伴奏形を作らせた。遠隔授業のみの2020年はさらに「メリさんのひつじ」をハ長調、ニ長調、ヘ長調、ト長調で記譜することを実施した。マイナーコードについては、対面授業の時は実際に音を出すことができるので、「大きな栗の木の下で」を取り上げて和音の説明をしたり、「メリさんのひつじ」を同主調に移調して弾いたりすることができたが、遠隔、併用授業ではできなかった。併用授業で弱起、シンコペーションを第8回目のシラバスの内容に入れたが、実際は時間がなく実施されなかった。

対面授業では第12、13、14回目に楽譜上のコードを分析したり、記譜したりしたのち伴奏譜をまとめさせた。第15回目はその演奏発表であるので、学習目標1.は直接的に入っていない。遠隔授業では第12回目には課題研究としての伴奏譜を提出させ、第13回目にそれを演奏させることを目的としていたが実際にはできなかった。併用授業では第11回目に学習目標3.の課題研究の発表を行ったので、学習目標1.の内容は入っていない。第12、13、14回目ではコードネームとカデンツを理解したうえで、伴奏譜を作

成させることを試みた。第15回目は学習目標3.のピアノ弾き歌いの発表が実施されるので、学習目標1.の内容は入っていない。

このように3通りの授業形態による授業を比較してみると、シラバスの内容の文言は大きく変わってはいないが、ピアノ演奏、ピアノの弾き歌い、子どもの歌斉唱など実技や演習は、オンラインを使用した遠隔授業では、かなり困難が生じるので、学習目標1.である「音楽理論を理解し、子どもの歌の音楽上の構造を理解する」に関しては遠隔や併用授業においてその比重が増し、対面授業よりもより緻密な内容となっている。

コロナ禍前は、一斉授業の形式で口頭、及び板書でコードネーム、音階の並び、和音の転回形を説明し、その都度実際に全員同時に弾かせてみるというMLシステムに沿った授業の形態をとっていた。しかし、キーボードの間を巡視しながら全学生が理論を理解できているのかどうかを確認していくには限られた時間では限界もあり、弾けていても実際は音楽理論に関しては全く理解できていない学生も散見した。具体的には、コードネームの「C」がハ長調とヘ長調、ト長調ではその機能が異なるということについての意味や、和音の転回形を使用したカデンツを正しく理解していない学生も多く、音楽理論の理解に関しては一人一人に対して十分な指導時間を取り切れていなかった。

全面遠隔授業では、音にタイムラグが発生し、同時にマイクをオンにするとハウリングを起こしてしまうため、一斉に音を出すこともできなかった。そこで対面授業の時に行っていた板書をパワーポイントによって説明し、学生個々に課題を出して記譜などをさせた。そしてパソコンの画面上に示された課題を個別に修正し学生が理解できるまで説明した。この結果、学生の理論の理解度は対面授業の時よりは深まっていった。しかし、この遠隔上では、学生が記譜したものを確認することができても、楽器を所有していない学生や、所有していても学生が演奏する鍵盤はパソコンの画面上で見るとは困難なので、実際に学生自身が自分の指を動かして、正しく和音の移行ができているかなどは判断できなかった。

併用授業では、パワーポイントを対面で授業を受けている学生には音楽教室前面のスクリーンに投影させ、オンラインの学生には画面共有で理論の説明を行った後、実際に記譜などをさせた。この作業では対面授業に出席した学生には、MLシステムに沿った手法を用い自分が書いた楽譜を実際に弾かせてみて、教員が直接修正したり指導することができ、学生も自身でカデンツなどの進行を実感することができた。一方遠隔で出席している学生は、対面で参加している学生が一斉に弾いているときに、マイクオフにし

て個々に教員と一緒に弾くよう促してはいたが、直接的にキーボードなどを使用しての指導を受けることはできなかった。実際に正しく弾いていたかどうかは確認できなかった。ただし、記譜の課題に対しては解答し、教員の指導を受けることができた。

(2)『2. ピアノ演奏および弾き歌いの技術を習得する』

近年、本学においてピアノやキーボードを全く習ったことがない学生がかなりの数に上り、多くの時間をこれら初心者基礎的技術の習得に充てなければならない状況があるように思われるが、これは本学のみならず、全国の保育者養成大学において起きている現象である。赤津(2015)は「本校の学生の傾向として、年々ピアノ初心者の入学生が増えている。現在も全体の半数は初心者である。(p.13)」と述べている。

また、二宮(2019)は、「子ども達と歌を楽しみ音楽活動を援助しなければならない職業を目指しながら、音楽は嫌いじゃない、むしろ好きだけれど大学のピアノは嫌い、人の前で弾くのも、弾き歌いするのも苦手と答える学生がクラスの8割を超える現実に問題を感じた。(p.125)」と述べているが、ピアノ初心者のみならず、ある程度ピアノを習っていても、人前で弾くのが苦手であるとか、ピアノを弾くのが嫌いといった学生もかなりの数に上っているようである。保育者養成大学においては、このような苦手意識を持った学生に自信をつけさせ、音楽の基礎的理論の理解の上に、弾き歌いなどを楽しみながら演奏させるためには教員の資質・能力に負うところが大きいと考える。

そこで、次に学習目標2.の『ピアノ演奏および弾き歌いの技術を習得する』という学習目標について3通りの授業形態を比較していく。

対面授業、遠隔授業、併用授業ともほとんど内容に違いはないが、遠隔授業は13回のため第8回目と第12回目には課題研究を提出させたのでこれらの回の内容は記載されていない。また、併用授業の第14回目は、第15回目を実施する弾き歌いの伴奏譜を仕上げさせるためにピアノレッスンは入っていない。若干異なるところは、弾き歌いの発表が対面授業では第2、5、10、15回目と実施されていたのに対して、遠隔授業では第2回目と第13回目の2回である。また併用でも第9回目と第15回目の2回である。

本学においては、コロナ禍前はすべて対面授業であり、教室での履修人数が多かったことから1回の授業で全員レッスンを実施できなかった場合があったため、一クラス20数名を1グループ7-8人の3グループに分けた。そして教員が個人レッスンをしているグループ、個人練習をしているグループ、学生同士で弾きあい、お互いにアドバイスをし合って振り返りを記入させるグループに分かれて授業を実施していた。このため、各回のピアノ弾き歌いレッスンはグループ別で行うとシラバスに記載した。(表2)

2020年は遠隔授業のみであったため、そもそもレッスンができなかった。しかし、当初はレッスンができるものとしてシラバスを組み立てていたため、2020年は2019年と同じような形態で授業のためのシラバスが作られた。ただし、遠隔授業となり、授業回数も13回であとの2回分は二つの課題を提出することで15回の出席と認められたためピアノ弾き歌いはグループ別ではなく11回分とし、13回目に弾き歌いの発表を行った。また2022年春期はコロナ禍の影響で教室内の人数制限のため学生は学籍番号末尾奇数番号、偶数番号に分かれて対面授業に参加することになっていたため、奇数番号、偶数番号での隔週でレッス

表2. 学習目標『2. ピアノ演奏および弾き歌いの技術を習得する』の比較

授業形態ごとのシラバスの比較			
2. ピアノ演奏および弾き歌いの技術を習得する。			
回	2019年度春期 対面授業(ML)	2020年度春期 遠隔授業(ZOOM)	2022年度春期 併用授業
1	グレード別弾き歌い課題曲の提示 ドレミで歌い主要三和音での伴奏を考えて弾く	グレード別弾き歌い課題曲の提示 主要三和音での伴奏を考えて弾く	経験値に応じた課題曲選曲
2 ~13	ピアノ弾き歌いレッスン (グループ別)	ピアノ弾き歌いレッスン (グループ別) 8回、9回は記載なし 13回はピアノ弾き歌い発表	ピアノ演奏及び弾き歌いレッスン
14	ピアノ弾き歌いレッスン (グループ別)	授業無し	コードネーム奏のまとめ (コード譜を片手伴奏譜として完成させる。 伴奏形も工夫する)
15	ピアノ弾き歌い発表 (コード譜から自分が完成させた伴奏譜で弾き 歌いする。)	授業無し	ピアノ弾き歌い発表 (コード譜から自分が完成させた伴奏譜で 弾き歌いする。)

ンを実施した。対面授業には、毎週奇数番号、偶数番号ともにそれぞれの約半数の学生が参加した。このため、対面授業に出席した学生と遠隔で受講する学生でグループを組むことは不可能であり、シラバスから(グループ別)の文言は削除した。したがって、グループ別に弾き歌いレッスンを行ったのは2019年度春期までで、2020年度春期は、記載はしたものの実際はグループ別の弾き歌いレッスンは行われず、2022年度は記載もなくグループレッスンは行われなかった。

コロナ禍における全面遠隔授業の場合は、自宅に楽器を所有していない学生に不利益のないようピアノの個人レッスンを授業内では実施できなかった。その後授業内でピアノに取り組むことができないことに学生自身が危機感を持つようになり、各自練習環境を整えるようになったため、2022年度は履修学生全員が遠隔授業でもレッスン受講が可能なるよう環境を整えていた。しかし、通信環境の不具合、タイムラグの発生などの問題があり、リズム、強弱やフレーズなど詳細に関する指導は遠隔上では困難であったため、対面で参加した学生にはレッスンを必ず受講させ、遠隔で受講している学生には主として記譜の課題に取り組ませた。

(3) 『3. 保育の中の様々な音楽活動に対応できる演奏力をつける』

表3は『3. 保育の中の様々な音楽活動に対応できる演奏力をつける。』という学習目標を比較したものである。

コロナ禍前の対面授業では、実習に向けて第4回目までは毎授業時に手遊び歌を紹介した後、学生は一斉にそれらの手遊び歌を練習して、ひとつでもレパートリーを増やそうとした。また、春期間内に幼稚園実習Ⅰ、(Ⅱ)、保育実習Ⅱ(Ⅲ)があり、各実習先より実習学生に多くの曲を練習してくるよう求められることが多々あり、第5回目から第9回目までは実習対策としての弾き歌いに多くの時間を費やした。

全面遠隔授業時には、オンラインでのパソコンの操作に関して教員への解説及び練習や授業の実施方法の説明など準備期間もあり実際の授業は15回から13回になり、第8、12回目は課題研究の提出、第13回目は振り返りとなったため、課題研究の課題を「手遊び」に関する内容とした。しかし、手遊びを遠隔で実際に実施してみると、やはりタイムラグが生じたり、画面が静止したりして、また教員がマイクオンにした場合ほかの学生はオフにしなければハウリングが生じることから、手遊びに関しては、学生一人一人に指導することはピアノレッスン同様困難であった。

表3. 学習目標『3. 保育の中の様々な音楽活動に対応できる演奏力をつける』の比較

授業形態ごとのシラバスの比較			
3. 保育の中の様々な音楽活動に対応できる演奏力をつける。			
回	2019年度春期 対面授業(ML)	2020年度春期 遠隔授業(ZOOM)	2022年度春期 併用授業
1	(該当の記載なし)	(該当の記載なし)	(該当の記載なし)
2	手遊び歌の実践①	手遊び歌の実践①	手遊び歌の習得①手遊び歌とは
3	手遊び歌の実践②	手遊び歌の実践②	手遊び歌の習得②手遊び歌の効果とは
4	いろいろな手遊び歌の実践	いろいろな手遊び歌の実践	手遊び歌の習得③乳児向け
5	実習対策:生活の歌①	(該当の記載なし)	手遊び歌の習得④親子で楽しむ
6	実習対策:生活の歌②	(該当の記載なし)	手遊び歌の習得⑤乳児向けの手や体の動きで表現する
7	実習対策:季節の歌①	(該当の記載なし)	手遊び歌の習得⑥言葉とリズムを楽しむ
8	実習対策:季節の歌②	課題研究1	手遊び歌の習得⑦いろいろなわらべ歌
9	実習対策:行事の歌	(該当の記載なし)	(該当の記載なし)
10	(該当の記載なし)	(該当の記載なし)	手遊び歌・パネルシアター・エプロンシアターなどの実践、発表①
11	(該当の記載なし)	(該当の記載なし)	「手遊び歌」についてのディスカッション及びレポート作成
12	(該当の記載なし)	課題研究テーマ:	手遊び歌・パネルシアター・エプロンシアターなどの実践、発表②
13	(該当の記載なし)	課題研究で作成したコード譜から自分が完成させた伴奏譜での弾き歌い	手遊び歌・パネルシアター・エプロンシアターなどの実践、発表③
14	(該当の記載なし)	授業無し	(該当の記載なし)
15	(該当の記載なし)	授業無し	今後の学びについて

したがって併用授業の時には、遠隔授業での反省点を踏まえて遠隔でも手遊びを指導できるようあらかじめ動画を用意したり、対面で参加している学生には実際手遊びを行わせ、それをオンラインで参加している学生も画面をミュートにして一緒に行うなど時間をかけても多くの手遊び歌に触れてレパートリーを増やすことができるような内容にした。また、音楽活動の応用として音楽で話を進めていくパネルシアターやエプロンシアターなども第10、12、13回目に制作と発表を行うよう計画していた。しかしながら、対象学生は1年次の授業がほとんど遠隔授業であったためにピアノ技術に不安な要素が多く、結果的に個別指導の比重が大きくなり、多くは取り組みなかった。学習目標3.のシラバスの内容の中の多くはその授業においてシラバス通りではなくピアノレッスンをを行っている。

(4) 各授業形態におけるメリット及びデメリット

授業の持っていき方によっては必ずしも遠隔授業や併用授業がマイナス面だけでなくプラス面もあることが明らかになってきた。さらに対面授業においても従来の取り組みをさらにMLシステムに沿った形態をとることで学生への指導効果が上がることが期待される。

そこで各授業形態におけるメリットとデメリットを、実際に授業を行った結果を踏まえて比較してみた。表4は各授業

形態におけるメリットとデメリットを比較したものである。

対面授業のメリットとしては、ピアノの個別指導を行うことができるほか、教員の伴奏に合わせて斉唱することやMLシステムに沿って一斉に弾き歌いできることが挙げられる。一方デメリットとして、音楽の基礎理論などの指導を板書で行っており、学生自身が記譜することもなかったため受動的になりがちで学生の理解度が低く、実際の弾き歌いの伴奏付けなどのスキルアップにつながらなかった。遠隔授業では、朝の起床後そのままパソコンなどに向かって授業を受けることができるので遅刻がほとんどなく出席率が高くなった。また、音楽の基礎理論などは、ZOOMの画面上で簡単に個別指導できるので課題提出率が良く明らかに理解度が増したと思われる。しかしピアノや歌に関しては、一斉指導が行えず、個別指導も時間的ロスが多く学生の演奏スキルの進行度合いは速くなかった。併用授業では対面参加の学生が一斉指導を受けられ、理論もすぐに理解度を確認でき、それらを見ている遠隔参加の学生も刺激されてモチベーションが向上した。しかし、対面の学生への実技の対応と遠隔の学生への対応に時間がかかり進捗が遅くなった。さらに直接指導を受けられる対面の学生に対して遠隔の学生の学習習熟度に対する差が出てくるというデメリットが生じた。

表4. 授業形態によるメリット・デメリットの比較

	2019年度春期 対面授業(ML)	2020年度春期 遠隔授業(ZOOM)	2022年度春期 併用授業
メリット	1. 全員個別のレッスンができ、ピアノの進度が直接確認できた 2. 伴奏に合わせて歌うことができた 3. 一斉に弾くことができた 4. 一斉に弾くことで止まらずに進むため、流れを止めてはいけないことに学生自身が気付いた 5. スキップなど付点のついたリズム変奏の指導ができた 6. ピアノの弾き歌いを学生同士で見合ったり、お互いに練習度合いを確認しあえた	1. 出席率がよかった(特に1限目の授業) 2. 基礎的理論の毎回の課題提出率が良かった 3. 個別の理論理解に時間をとることができた 4. 学生が人目を気にせず質問を寄せられることからチャットでの質問が多くなった	1. 理論の理解が実際の演奏に結びついているかその場で確認することができた 2. 対面で参加の学生に関しては、一斉に弾くことで学生同士が励まし合い、流れを止めない意識ももてた 3. 対面の学生同士で、理論課題を修正しあったり、ピアノの弾き歌いを見合ったりできた 4. 学生同士の刺激、モチベーションの向上につながった
デメリット	演奏技術は進歩したが、ただ弾けていても理論の理解が伴っていなかったために伴奏の応用などが学生自身でうまくできず、弾き歌いのスキルアップにつながらない学生が多かった	1. ピアノ、歌唱、リズムに関しては直接指導できず、学生の習熟度を把握しきれなかった 2. 一人で弾くと、自分の都合で間違えては弾き直しを繰り返した	1. 同時に理論、レッスンを並行するので進捗が遅くなり、個人のレッスンの時間が少なくなった 2. オンライン参加の学生が対面で出席の学生に比して、ピアノ、歌唱、リズムに関する指導など直接受けられないハンディがあった

村木(2022)が「オンライン受講生だけを相手にするのであれば画面にだけ集中すればよいので、ある程度学生の様子がうかがえたのだが、ハイブリッド型では目の前の学生とオンライン受講生の両方に配慮する必要があるため、受講生全員に目が届きづらい(p.122)」と述べているように、併用授業では、対面授業、遠隔授業と異なり学生への公平性が失われることが懸念される。

4. 考察

2019年以前、授業は対面で行うのが当たり前であったが、前代未聞のコロナ禍のために、全面遠隔で授業を行わざるを得なかったり、対面と遠隔を併用した授業を取り入れたりせざるを得なかったことが、コロナ禍以前の対面授業を見直すための良い機会となった。すなわち、全面遠隔で授業を行わざるを得なかったことによって、それまでの授業では板書だけで済ませていた基礎的な音楽理論の学習を、パワーポイントを使用して説明するとともに、その後課題を課し、個別に指導することで学生の理解度が増し、ピアノの弾き歌いの際の伴奏付けや、移調などが容易に行えるようになっていった。このことによって、今後対面授業において音楽の基礎理論をパワーポイントなどを使用した説明と課題を丁寧に行うことにより、若干ピアノレッスンの時間が短くなったとしても、弾き歌いのスキルは大幅にアップすると考えられる。

遠隔授業においては、タイムラグやハウリングの問題などで、学生が一斉に弾くことができなかつたため、『一人で弾くと、自分の都合で同じ個所を間違えては弾きなおし』を繰り返し、結果として、止まらずに弾き通すことができなくなっていた。しかし、MLシステムに沿った対面授業を行った場合、一斉に弾くことで一人が間違っても、全体として止まらずに進むため、音楽は流れを止めてはいけない、ということに学生自身が気づき、その気づきが、つまづいたりした場合、各自が後で間違えた個所を個人で練習することに結びついていくと考えられる。すなわち間違っても音楽の流れを止めずに弾き切るということは個人の練習においても効果的であるといえる。

さらに、MLシステムに沿った授業の弾き歌いなどの演奏では学生同士がお互いに聴きあい、アドバイスしあうこと、短いフレーズでも弾けるようになった、というような小さな成功体験の積み重ねなどが刺激となり、モチベーションが飛躍的に向上するのではないかと。そして、それがより高い職業意識と現場での即戦力としてのスキルを持った保育者としての人材を育成できるのではないかと考える。

対面授業が再開され、学生が音楽室でそれぞれの練習を見せ合い、わからないところは聞き合う、ピアノの経験のある学生が初心者に教え合う、といった対面授業では当たり前であった光景をコロナ禍を経て再び見られたとき、学生同士が前述したような学び合うなかでのコミュニケーションの重要性を再認識できていくことが期待される。

5. 結論

1) 結論

2019年度までは当たり前のように行われてきた対面式の授業形態が大きく変化せざるを得なかった結果、3通りの授業形態が生じた。学生の学びを止めないためにそれらの授業形態で、試行錯誤をしながらも授業を実施していったが、授業の持っていく方によっては必ずしも遠隔授業や併用授業がマイナス面だけでなくプラス面もあることが明らかになり、MLシステムに沿った形態による対面授業において、遠隔授業や併用授業でのプラス面を取り入れることで学生の学習効果が上がる可能性のあることが明らかになった。このことから、遠隔授業の経験を生かした理論と実践がバランスよく両立できる新しいMLシステムに沿った授業を展開することによって、コロナ禍終息後は、従来のMLシステムに沿った対面授業よりもさらに教育効果の高い新しい授業スタイルを構築することができる可能性が示唆された。

2) 今後の課題

オンラインでの利便性が強調され、ICTが推進されていくなかで、今後ICTが活用され、従来とは異なる反転授業やブレンデッド・ラーニングなどの導入によって、より効果的な学習方法が展開されていく可能性は大きいと考えられる一方、音楽といった人と人とのコミュニケーションツールにおいては、対面での生の歌声やアンサンブルなどの大切さを常に訴え続けて行くことも今後の課題として重要であると考えている。

また、2023年度から実施されるカリキュラムの全面的見直しによる再課程認定により、本学の音楽科科目のシラバスも大幅に刷新されることとなった。そのため、シラバス作成にあたっては、本研究でよりよく集団効果が表れることが明らかになったMLシステムに沿った授業内容を活用したい。なお、本学教室はMLのシステムそのものが導入されているわけではないので、MLシステムに沿って行く中で活用可能な部分を応用していく授業を展開していくことが今後の課題であろう。

注

- 1) ML (ミュージック・ラボラトリー)システムは、指導者用楽器(親機)と学生用楽器(子機)をケーブルで接続することにより、大人数での鍵盤学習を効率的に行なうシステムである。本学では教員側にあるキーボードと学生のキーボードは接続されていないので正式のMLシステムではないが、MLと同じ様式でキーボードが配置されており、教員が個々の学生にレッスンをしたり、一斉に弾き歌いをさせたりできることから、MLのシステムに沿った授業と称することとする。
- 2) 本学では、シラバス作成過程において、親シラバス制度を導入している。親シラバスとは、シラバスの項目のうち、「授業形態」、「講義概要」、「学習目標」、「成績評価の規準と評定の方法」の4項目を同一科目で共通化した母体のシラバスを意味するシラバスである。
- 3) 三(四)和音を構成する音をオクターブ上げ下げして、根音以外の音がいちばん下になることを、和音の転回と言う。転回した和音を和音の転回形と言う。また、転回形でないもの、すなわち、根音がいちばん下になっているものを、和音の基本形と言う。

- 4) セブンスコードとは、C7、Cm7、と言った具合に、メジャーコードやマイナーコードの3音に加えて、長7度か短7度にある位置の音を加えた和音のことを言う。

引用文献

- 赤津裕子(2015): MLシステムを活用した初心者のピアノ指導における成果と課題. 電子キーボード音楽研究 **10**, 13-23.
- 村木桂子(2022): ポストコロナの初年次オンライン授業を目指して一オンライン授業とハイブリッド型授業の比較から見えてきたもの一. リメディアル教育研究 **16**, 115.
- 村木桂子(2022): ポストコロナの初年次オンライン授業を目指して一オンライン授業とハイブリッド型授業の比較から見えてきたもの一. リメディアル教育研究 **16**, 122.
- 二宮紀子(2019): ピアノ演奏に関わる授業等での教授法を振り返る. 十文字学園女子大学紀要 **50**, 123-136.

Revision of Syllabus in Music Classes according to ML System: Gainings from the teaching format in the Corona Disaster

Yoko MOTONO

Junior College of Social Welfare,
Tokyo University and Graduate School of Social Welfare (Isesaki Campus)
2020-1 San'o-cho, Isesaki City, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : Face-to-face learning in music-related courses that were offered at the University until FY 2019 had to be offered remotely from FY 2020 due to the spread of the new coronavirus. Since then, the regulations have been slightly eased, and classes were offered both face-to-face and remotely from the spring semester of FY2022. The syllabus for “Children’s Music I,” for which the author is in charge, lists the following learning objectives: 1. to understand music theory and the musical structure of children’s songs, 2. to master piano performance and singing techniques, and 3. to acquire performance skills for a variety of musical activities in childcare. For each of the three learning objectives, face-to-face We compared and verified the contents of 15 syllabus sections for face-to-face learning, distance learning, and combined learning for each of the three learning objectives. The reason for this was the belief that after further deregulation, rather than returning to the pre-Corona disaster face-to-face learning, a new style of face-to-face teaching could be implemented by incorporating the advantages gained from distance and combined learning into the face-to-face learning. Originally, the advantages of face-to-face learning included the ability to teach the piano individually, to sing to the accompaniment of the teacher, and to perform and sing in chorus according to the Music Research Institute’s system. Therefore, by incorporating the teaching methods of basic music theory that had been used in remote and combination learning into the face-to-face learning, it became possible to construct face-to-face learning that were more effective in teaching according to the Music Research Institute’s system.

(Reprint request should be sent to Yoko Motono)

Key words : Syllabus, Music Laboratory, face-to-face learning, distance learning, combined face-to-face and distance learning